粗（あら）探しとは

伊自良中学校3年　横山　花名

『粗探し』をしてください。」と言われて、みなさんはできますか。「粗探し」とは、人の過失、または欠点を探し立てることです。私は、「粗探し」は良いことだと思います。もっと具体的に言うならば、粗探しは良いことに変えられると思うのです。粗探しに悪い印象をもつ人は多いでしょう。ですが、粗探しは、三つの良いことに変えることができると私は考えます。

一つ目は、質問マスターになれることです。学校では、校外学習などで、色々な人にお話を伺う機会があります。そして、最後に必ず言われる言葉があります。「質問はありますか。」です。私はこの言葉が苦手でした。質問する人が誰もいないと空気が悪くなるし、前半の方に既に話していた内容と同じことを質問して、「さっき言ったよね。」という空気が流れるのも嫌だったからです。ですがある日私は気付きました。質問することは、話を聞いて興味をもったことやさらに詳しく知りたいと思ったこと、つまり話の「粗」を探して相手に伝えることと同じなのではないか、と。話の粗探しに慣れてくると質問がたくさん湧いてきます。実際、私も質問タイムで一番に手を挙げられるようになりました。「いい質問ですね。」「質問してくれて助かったよ。」などと、言ってもらえることが増えてきました。このように、粗探しは質問マスターになれるという良いことに変えることができます。

二つ目は、起こりそうな問題を予測できることです。学校生活の中で、計画を立てて準備し、発表する機会はたくさんあります。そんな時、「準備不足で問題が起こりました。」何てことになったら大変です。でも、粗探しをする癖をもっておけば「この点が心配だな。」「このような問題が起こりそうだな。」というように考え、起こりそうな問題を予測して別の方法を考える、念のため準備しておくなど起こる前に対処しておき、構えることができるのです。実際に私は、生徒会で新入生歓迎会を行うことになった時、レクリエーションで「これだと移動の仕方や場所が分からずに戸惑ってしまうな。」と思い、分かりやすい俯瞰（ふかん）図を用意したり、ゲームを進行する上で、番号を振っておいた方がいいなと書き換えたりすることができました。このように、粗探しは起こりそうな問題を予測できるという良いことに変えることができます。

三つ目は、物事をもっと良くできることです。粗探しをする癖をもっていると、日常生活の問題点や、もっとこうすればいいのにと思うことがたくさん見えてきます。日々の習慣、形骸化してしまったルールや風潮など、私たちが当たり前に過ごしている日常の中に、もっとよくできるヒントがあふれているからです。私は、物事をよくするにはまず悪いところを直すことが大切だと考えます。普段から悪いところが見えていれば、自分からそれを直そうとすることだってできるし、「アイデアを出そう」という機会が来たら、様々な意見を提案することだってできるのです。このように、粗探しは物事をもっと良くできるという良いことに変えることができます。みなさんは「粗探しは良いことに変えられる」についてどう思いましたか。

このように、粗探しは様々な良いことに変えることができます。ですがこの三つとも自分が、「粗探し」をした後何をしたかによって良いことに変えることができていると思うのです。「粗」を見つけた後、そのまま放っておく、後から悪口のような形で言うなどしていては、ただ自分に悪い癖をつけるだけ、場合によっては相手を傷つけることになってしまいます。

「粗探し」という悪い癖、今から良いことに変えてみませんか。

▲少年の主張大会に参加した9人の生徒

令和6年度　山県市少年の主張大会

市少年の主張大会で優秀賞に輝いた2人の生徒の作品を紹介します。

幸せを作る言葉の力

高富中学校3年　夏目　梨央

「あなたは言葉を大切に使っていますか。」そう聞かれてすぐに「はい。」と答えられる人は、どれくらいいるだろうか。古くから日本では、言葉には不思議な力が宿り、口に出した言葉は「言霊」となって現実に大きな影響を与えると信じられてきた。しかし現代、日本では言葉の持つ力に目を向けず、無意識に使うことで誰かを傷つけている光景をよく目にするように思う。SNSでの誹謗中傷により不登校になったり、命を落とす人が後を絶たないことが社会問題となったりしているが、動画サイトへの心無いコメントなどでも、傷つけてやるという明らかな意思を持ったものとは別に、その場のノリで面白いと思って、言葉の力を深く考えず発信しているものも多いように感じる。残念ながら、そのような言葉を軽んじる風潮は、ネット社会だけでなく学校生活の中にも存在している。

中学生になって私たちは、今までとは異なる、ノリやリズム、雰囲気を重視した会話をすることが多くなった。そのような会話は高揚感がありとても楽しいものだが、その会話の中では良くも悪くも強い言葉が好まれ、言葉の持つ力の危険性は軽んじられる。大抵の場合は、マイナスの言葉を受けても、築き上げてきた信頼関係や発した本人の表情、態度などを基に、頭の中の翻訳機を使ってプラスの言葉に変換して聞いている。しかし何度も重なれば、言葉は私たちの心を深く傷つける刃となり、最後には揺るぎないと思っていた絆をも断ち切ってしまうのだ。そんな危険物としての姿を持つ反面、言葉の大きな力はプラスにも働く。

私は幼い頃から読書が大好きだった。小学生になると毎朝、偉人の言葉が載った本を開き、その日出逢った言葉をお守りのように胸に抱えて登校していた。言葉はいつもより私を強くしてくれ、迷った時には行く道を照らす道標となってくれた。高学年からは歌を聴くことも趣味に加わり、好きな曲の歌詞の中でも、素敵な言葉に出会えるようになった。辛くて悲しくて消えてしまいたくなった時には、本や歌詞の作者が紡いだ言葉たちが、悲しみの雨から私を守ってくれる傘となった。

言葉は使い方次第でさまざまに形を変える。そして言葉の力は、誰もが平等に使うことができる魔法のようなものだ。

私は今テニス部に所属しているが、そこでも意識的に言葉の魔法を使うようにしている。ダブルスの試合中、いつもの調子が出ずに失敗が続いて心が折れそうになった時、弱い心を打ち消すように、強く祈りながら魂を込めて「大丈夫、次入るよ！」と声を張り上げている。その言葉はペアの心に届くようにと発したものだが、言葉を発した私自身にも、大きな希望と勇気を与えてくれる。以前、実力差が大きくとても敵わないと思っていた相手との試合で、思いがけず勝利を収められたことがあった。その時はいつもよりペアとのコミュニケーションが多く、思いのこもった本気の言葉をお互いにかけ合うことで心が通じ、普段以上の力を発揮できていたように思う。つまり、言葉の魔法が強く働いていたのだ。

心から何かを、誰かを思って言葉を発する時、魂は一つ一つの言葉の形をとり、伝えたい相手の心に直接触れる。そんな心の核にまで届く言葉こそ、「言霊」なのかもしれない。

「言霊」は万葉集の中にも、「大和の国は言霊の幸う国」として登場する。これは、日本は「言霊」が幸せをもたらす国だ、という意味だ。そして、「幸う」とは「幸い」のことであり、その語源は「咲き這う」、つまり「心に咲いた花が這うように広がって長く続くこと」を意味している。相手を思う温かい心で発せられた言葉は幸せを生み出す。私はそんな言葉「言霊」の力を信じている。「言霊」が幸せをもたらす世界。私はまず一番身近な社会である学校で、真心のこもった温かい言葉をかけ合い、互いの心に平和を築きながら笑顔の花が咲き誇る幸せな環境をみんなで作っていきたいと思う。

言葉は私たちの思いを乗せて未来へと向かう。紡いだ言葉は自分自身を作り、いつしか運命へと繋がる。私たちは言葉の力で幸せな世界を作り出せる、そう信じている。